

ふるさと



紙魚のつぶやき

本 「陸奥の友」——大正時代、青森に夢を追いかけた人々——

館田勝弘編著

大正時代の「県人雑誌」

【青森に夢を】

大正時代の「在京青森県人雑誌」とでもいうべき雑誌があった。その全体像を記録した本が、昨年夏に「青森の文学4」として刊行された。表題は『陸奥の友』で、副題には、大正時代、青森に夢を追いかけた人々とある。

編者は、青森県の郷土作家研究をライフワークとする館田勝弘氏だ。

彼は、大正時代の青森県の姿を表している雑誌は、これ以外になく、大正時代の文学、政治、経済、社会一般にわたる内容が掲載されている雑誌の細目が必要である。と考え、中断

の紹介

を挟み十年余をかけて、この本をまとめたという。

内容は、次の三部から構成されている。

① 「陸奥の友」細目

全冊の詳細内容を、各号ごとに頁付きで整理

② 著者別著作一覧

著者別に、各著作の掲載号を検索できるように整理

③ 「陸奥の友」本文

掲載された論考や文芸作品の一部を、抜粋して紹介

【雑誌「陸奥の友」】

この雑誌は、1918年に東京で創刊され、10年足らずで廃刊となった。

編者は、青森県人という強い帰属意識により青森県人雑誌が東京より創刊された。誌上には、青森県をいかに発展させるか、という各人の意見が載る。外交官の珍田捨己や佐藤愛磨、実業家の藤田謙一や佐々木嘉太郎、画家の前田照雲、

軍人の一戸兵衛、天文学者の一戸直蔵、衆議院議員・参議院議員の菊池良一や伊東重、津島源右衛門等の名前が見える。とまとめて

いる。この「青森県をいかに発展させるか」という問題意識は、現在の「東京青森県人会」で、活躍している人々の意識にも通じる。

発行所は早稲田の菊屋出版部内にある（「東京」陸奥の友社）で、主幹は池田善左衛門だ。彼の旧名は、

武田富七で、弘前の豪商金木屋（武田熊七）の六男だ。発行兼編集人の武田義七も、名前から見て親戚筋と推測される。

顧問だった秋田雨雀は、4号への寄稿で「陸奥の友」は「特殊な人々の寄付行為にも待たず、その内容もきわめて自然な編集方法を採って我が郷土の自由な意思発表の機関となり」と自賛した。

実はこの会の初期中心メンバーは、青森県出身の在京芸術家（絵画・彫刻・文学・演劇）達であり、津軽

英麿等の協力を得ていた。創刊号には、津軽英麿（弘前津軽家）と南部利克（八戸南部家）という両当主の写真が掲載されている。南部信方（七戸南部家）や津軽益男（黒石津軽家）も、後に登場している。旧藩以来の対立感情を乗り越えようとしたのだろう。逆に、盛岡南部家や斗南松平家が登場しないことも注目される。

中心的協力者だった津軽英麿が1919年に急逝した後も、掲載量が増え百頁を超える号もあり、順調な発展をうかがわせる。

しかし、1923年の関東大震災以降は、事実上の不定期発行となった。最終号となった1927年2月号（通算58号）は、28頁にまで落込んだ。誌面に廃刊への言及はなく、突然の廃刊だったようだ。

【記録として】

このようにして幕を閉じた雑誌だが、一世紀後の現在もその資料的な価値が高い。

「陸奥の友」は青森県立図書館と弘前図書館にそれぞれ所蔵されており、欠本は他館の所蔵本で補うことができる。現在も閲覧者が訪れている模様で、前述の編者の評価の通りだ。

また、1920年に「陸奥の友社」から発行された「在京青森県人名簿」は、弘前図書館（岩見文庫）で閲覧可能だ。

創刊号で雨雀が書いた「発行の趣旨」に、この記録は真に小さなものであります。私達郷里を同じくする人々のほんとうの生活の記録にしたいと思ひます。

とある。「記録」という意味では、雨雀の願いは実現されたといえよう。さて、本誌「東京と青森」は本号で576号となるが、後世にどのような評価を受けるのだろうか。発行「青森県郷土作家研究会（非売品）連絡先〒036-8043 弘前市東和徳町10-4 館田方



『陸奥の友』の創刊号、青森県郷土作家研究会蔵

（笠井哲哉 記）